

命の大切さを学ぶ教室  
全国作文コンクール

第5回

【優秀作品集】

警察庁 犯罪被害者支援室



# 発刊にあたって

犯罪被害者やその家族・遺族（犯罪被害者等）が受ける被害は、犯罪行為そのものによって生じる心身の被害のみでなく、周囲の人々による心ない言動による二次的被害、職を離れざるを得なくなることによる経済的困難、社会からの孤立感など、その影響は広範囲かつ長期間にわたります。犯罪被害者等が再び平穏な生活を取り戻すことができるようにするためには、犯罪被害者等を直接対象とした支援のみならず、地域社会や学校・職場、さらには将来の社会を支える子供たちには、犯罪被害者等が抱える困難や思いについて理解を深めていただき、社会全体に犯罪被害者等を思いやり、犯罪被害者等を支える気運を醸成していくことが極めて重要です。

このような観点から全国警察では、これからの社会を担う中学生・高校生を対象に、犯罪被害者等による講演や犯罪被害者等の手記の朗読等により、犯罪被害者等が受けた様々な痛み、子供を亡くした親の思い、命の大切さ、被害者も加害者も出さない社会を望む犯罪被害者等の思いを伝える「命の大切さを学ぶ教室」の開催や、大学生を対象とした被害者支援に関する社会活動への参加を促進するなど、「社会全体で被害者を支え、被害者も加害者も出さない街づくり」に向けた取組を、犯罪被害者等の御協力を得ながら、教育委員会、民間被害者支援団体等と連携して積極的に進めています。

中でも、「命の大切さを学ぶ教室」は、犯罪被害者等への理解・共感を生む効果が大きいものであるのみならず、規範意識の醸成にもつながります。「命の大切さを学ぶ教室全国作文コンクール」は、この「命の大切さを学ぶ教室」の効果を一層向上させるための取組として、警察庁が平成二十三年度から開催しているものであり、今年度からは新たに文部科学大臣賞が設けられ、「命の大切さを学ぶ教室」に参加する中学校・高校が増え、この取組の更なる広がりが期待されるところであります。

本冊子は、平成二十七年年度の第五回コンクールにおいて、全国から応募された作品の中から選考した

国務大臣・国家公安委員会委員長賞……………二点

文部科学大臣賞……………二点

警察庁長官賞……………六點

の優秀作品をとりまとめたものです。

警察としては、被害者支援に携わる方々との緊密な連携の下、今後も「社会全体で被害者を支え、被害者も加害者も出さない街づくり」の実現に向けて、「命の大切さを学ぶ教室」を始めとする諸対策に取り組んでまいります。本冊子が、犯罪被害者等が長期にわたり直面する心身の苦痛やその置かれた厳しい状況等とはもとより、被害者支援の重要性等について、広く国民の皆様方に御理解いただく一助となりますことを心より願っております。

平成二十八年二月六日

警察庁給与厚生課犯罪被害者支援室長 野川 明輝



# 目次

## ☆中学生の部

### 【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

・僕たちの未来と命

熊本県立玉名高等学校附属中学校

二年

江口 塁

.....

1

### 【文部科学大臣賞】

・あなたは大切だ。

新庄市立明倫中学校

二年

五島 里緒

.....

2

### 【警察庁長官賞】

・かけがえのない宝物

栗原市立志波姫中学校

二年

大河原 ひなた

.....

3

・命の大切さを学んで

大治町立大治中学校

二年

石間 そら

.....

4

・一人一人の奇跡の命

津市立朝陽中学校

一年

市川 愛莉

.....

5

# ☆高校生の部

## 【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

・命の大切さを学ぶ教室で得たもの 山口県立小野田工業高等学校 三年 テイラー 優介 …………… 7

## 【文部科学大臣賞】

・講話を聴き、大切にしたいこと 岐阜県立岐阜各務野高等学校 一年 大塚 彩妃 …………… 9

## 【警察庁長官賞】

・講演会を聞いて 青森県立八戸高等学校 二年 小川 青夏 …………… 11

・生の証 秋田県立湯沢高等学校 二年 小川 慧子 …………… 13

・何よりも大切な命 山形県立庄内総合高等学校 一年 齋藤 翔子 …………… 15

# 【中学生の部】

## 僕たちの未来と命

(熊本県)

熊本県立玉名高等学校附属中学校 二年

江口 塁

僕は今、未来に向け、日々努力を重ねている。これが僕らに課された義務だと。しかし、目の前で話している僕の母と年齢も変わらない、温かくて、優しいような女性。その女性の口から出てくる言葉は、とても重く、僕らの思い描く未来が平等に訪れるものではないことを教えてくれた。僕は、悲しくて恐くて、自然に涙が溢れていた。

飲酒運転の文字を新聞で見ない日はほぼない。その文字を見る度に、どうして大人は分らないのだろうかと思う。想像だが、きっと、自らの手でジョッキを握り、自らの手でゴクゴクと喉を鳴らして飲んでいく。そう、全て自分の意志で。ただ、ここまでは大人の特権と言ってもいい。問題は、この後の行動だ。なぜ、ハンドルを握るのか。僕は毎日、自宅から駅、駅から学校まで歩く。細い道、県道、国道と歩むが多くの車とすれ違う。僕は、それらが僕に突っ込んでくると思ったことはない。それは、運転者を信用しているからだ。いや、信用というよりも、突っ込んでくることはないというのが当たり前だと信じているからだ。それなのに、その女性の大切な息子さんの命は、ハンドルを握る大人に奪われ

てしまった。大人の自分勝手な都合、思い込み、浅はかな考えによって、輝く未来が突然奪われた。明日という日が来ることがなくなつた。彼も僕と同じように、車が自分に突っ込んでくるとはならない、そう思っていたに違いない。どうして、たかさんの可能性と夢に溢れた彼の命が奪われなくてはいけないのだろうか。

飲酒運転が問題視されて、久しい。大人は、分かっているはずだ。僕らよりもその怖さに。でも、どうしてなくならないのだろうか。お酒を飲んだら、車の運転はしません。こんなにシンプルなことを、なぜ大人は守れないのだろうか。

僕は、この講演のことを母に話した。僕が考えたことや山本さんの息子さんの話、涙が溢れたこと、そして、明日がみんなに約束されたものではないことを。すると、母は少し目を赤くして、「もしあなたが突然はあなたに繋ぐための命だから・・・山本さんは、人生で一番辛いことをいろんな人たちに真剣に考えて欲しいから、話す度に辛い思いや悲しい思いをして・・・」最後はよく聞き取れなかった。

僕らは、未来が来ることを疑わず、前へ前へと進み続けている。僕らの命は、大切な人たちが長い歴史を経て繋げてくれた尊いものだ。それを奪う権利は誰にもない。僕らの時代から必ず変えていこう。飲酒運転という文字がこの世からなくなるように、僕らがお手本になろう。そして、愛する人たちに命を繋いでいこう。



【文部科学大臣賞】

あなたは大切だ。

(山形県)

新庄市立明倫中学校二年 五島 里緒

希望を持ち、夢を持ち、毎日一生懸命生きていた少女がいた。何も変わらない朝、彼女はいつもどおり「いってきます」と言って学校へ登校した。しかし、突然悪意を持った大人に刺殺され、わずか七歳でこの世を去った。平成十三年六月八日のことだったそう。

この事件を、私は七月にあった「命の大切さを学ぶ教室」で初めて知った。講師は娘さんを亡くされた本郷紀宏さん。娘の優希さんは何度切り付けられても、本郷さんの「最後まであきらめない」という教えを守り、息絶えるまで必死に逃げようとした。

この講演を聞いて、正直最初は頭が恐怖でぐちゃぐちゃになったような気がした。私は何もできない。目の前に助けを求める優希さんが見えて、もう過去のことだとわかつているのに、自分の無力さに絶望すら感じた。会場となった体育館は、すすり泣く人、呆然と聞く人、怒りにこぶしを握る人、様々な感情があふれていた。

本郷さんの講演の中で特に印象に残ったのは、「これはどこかで防げる事件だった」という言葉だ。犯人は幼いころから家族からも周りから

も愛されることがない人だったという。「愛を知らない」から、愛をたくさんもらって幸せに暮らしている人たちが憎くて、恨んで、こんな事件を起こしたのかもしれない。誰か一人でも犯人を気にかけて、大切にしてくれる人がいたなら、優希さんの結末は変わっていたのかもしれない。

「こんな思いをするのは私たちだけでいい」そう話す本郷さんはとても強いと思った。娘さんを亡くして、守れなかった絶望感にうちひしがれ、生きる希望すらなくしかけたというのに、自分と同じ思いをする人が出ないように、こうして私たちに命の大切さを伝えようとしてくれる。犯人と同じように、誰からも愛をもらえなかったがゆえに人を傷つける痛みがわからない人間をなくすために、「あなたは大切な人、代わりは誰もいない」というメッセージを発信し続けている。

実は私たちの明倫中学校でも、平成五年に校内で生徒の命が失われてしまった事件があった。その出来事から、明倫中学校には、一日中命の大切さについて集会や授業で考えていく、「いのちを深く考える日」がある。私たちは失われてしまった生徒の命を背負って、生きたかったその人の分まで自分のいのちを精一杯生きなければならぬ。それが明倫中学生全員の責任だと私は思っていた。

本郷さんのメッセージを受け取った私は、さらに次のことを付け足さなければならぬと思った。それは、「本郷さんと同じ思いをする人」をなくすことだ。そのために私は、「あなたは大切な人だ。」と周りに伝え続けていきたい。自分も、他人も、この世にいる人皆が大切なのだと、誰もがそう思えるよう、まず自分の周りから変えていこうと思う。

## かけがえのない宝物

(宮城県)

栗原市立志波姫中学校 二年 大河原 ひなた

「命を大切にしていますか。」と聞かれれば、きっと多くの人が「はい。」と答えるだろう。

けれども、本当にそうだろうか。若者の自殺、悲惨な殺人事件の報道に心が痛くなる。更に、SNS等で「死ぬ。」「消えろ。」というような残酷な言葉を、簡単に発したり読んだり・・・。自分の命や他人の命を、本当の意味で大切にしている人は少ないのではないか。

そんなことを考えていたとき、「命の教室」に出会った。当時小学校三年生だった翔樹君を失ったお母さんの思いが、私の心に突き刺さった。翔樹君は信号無視の大型特殊クレーン車に轢かれて、この世を去った。登校途中だったそうだ。

翔樹君の最後の言葉は「行ってきます。」だったという。友達と学校で「おはよう。」を言えないまま、家に帰って「ただいま。」と言えないまま、この世を去ってしまったのだ。まだまだ家族と、友達と、一緒にいたかったはずだ。

「悔しい。」「悲しい。」そんな言葉では表せないほどの恐怖と苦痛の中で。お母さんは、ショックのあまり現実を受け止められなかったという。

それもそのはずだ。さつきまで確かに自分のそばで笑っていた、確かに声を聞いていた、そんな自分の大切な子どもが、何の前触れもなく姿を消した。もう二度と顔を見ることも、抱きしめることもできない。そんな残酷な現実には耐えられるはずがない。そんな苦しみは、ずっと消えることなく続いているのだ。

子を思う親の気持ちとは、これほどのものなのだ・・・。自分の命は、自分一人だけのものではないのだと改めて感じた。

人はあまりにも命を軽視しすぎていると思う。翔樹君の事故はもちろん、いじめや殺人、飲酒運転や薬物乱用による事故が絶えず起こっている。それはやはり、私達が命の重みを、本当に理解していないからだ。

私達は東日本大震災という恐ろしい体験をしたにもかかわらず、このような悲惨な事件が、なぜ起こり続けるのだろうか。

ニュースでは、たった一、二分で語られてしまう事件事故、その陰には翔樹君のお母さんが味わったような苦しみや悲しみがあるということ。本当に重要なことが、うまく伝わらないのが悲しい。もっと他者の痛みを自分に置き換えて考えていくことが必要である。

命は、一つとして代わりがない宝物だ。誰もその人に代わることはできない。そして、そんな大切な命は、はかなく、とてももろいものである。誰かの命の灯し火が消えれば、多くの涙が流されるのだ。そんな悲しいことが少しでも減るように、一人一人が命の重さを心に留めおかなければならない。

「命を大切にしていますか。」という質問に、胸を張って「はい。」と答えられる私でありたい。そう深く思った。

## 命の大切さを学んで

(愛知県)

大治町立大治中学校二年

石間いしま そら

「角材を持った四人の少年により、頭を殴られ続けました。さらに、その中の一人は顔めがけて五キロもある、ブロック片を投げつけることもしていたのです。」

これは、受講した一井さんの話の印象に残った部分の一つです。いつもなら、このようなニュースを見ても、「ひどいなあ」というようなこととは思いませんでした。しかし、実際に大切な人を亡くした話を聞き、言葉にならないような気持ちが入み上げてきました。

そして、これを機に私は、自分ができること、気をつけなければいけないことを考えてみました。それは、「言葉」です。

この事件をもつと調べてみたところ、一井さんは、病院で息子さんを見取った後、家へ戻ると、大勢のマスコミがいたそうです。ある新聞社には、「けんかごっこ」と、事実と異なることを書かれたそうです。この他にも、周囲の人達の視線は冷たくなり、友人からは、「殺された側にも理由がある」とも言われたそうです。私達にも、このような場面はよくあるのではないのでしょうか。本当か嘘かわからないような噂で、

相手のことを決めつけたり、傷つけていることが多いと思います。

無責任な発言や勝手な思い込みが、相手を一生傷つけることもあるのです。言葉は、とても身近なものです。しかし、それは私達が思っているよりも何倍も重く、ときには暴力と同じほどのものになります。だから、言葉を使う前に、相手の立場になって考えてみると、そこから始まるいじめも少なくなるのではないのでしょうか。

それから、私はもう一つ考えたことがあります。それは、「人と人の関係の大切さ」です。

一井さんが息子さんを亡くされてから二十年、そばでずっと支え、悲しんでくれたのは、息子さんのたくさんの友だちや先輩だったそうです。これを聞き、私は今、たくさんの人に支えられているということに改めて気づきました。周りの人の大切さは、分かっているようで、当たり前のように感じていたと思います。だから、私は今、大切な人たちと一緒に生きていくことに感謝しようと、強く思いました。

私は、この教室により、今までより深く、「命の大切さ」を考えることができました。

ニュースの事件は、他人事ではありません。いつでも、相手の立場になって考え、今生きていることに感謝することで、少しでも事件を減らすことにつながったら、と思います。

一人一人の奇跡の命

(三重県)

津市立朝陽中学校 一年

市川 愛莉  
いちかわ あいり

今日鷺見さんの話を聞いて、たくさん思ったことがあります。まず、私は事故にあったことも、事故で周りの友達を亡くしたこともありません。

しかし、私は小学二年生の時、すごく仲の良かった子が火事でお父さんを亡くしています。ちょうど夏休みに入る時ぐらいで、亡くしてすぐに転校していきました。その子とはすごく仲が良く、休み時間もずっと一緒にいました。火事でお父さんを亡くす前はすごく明るかったその子が、お父さんを亡くしたことで人が変わったように元気がない子になりました。

転校するまでに二、三回は学校に来てくれて会えたけれども、ものすごく思いつめてて本当に人が変わったようでした。私はそんな彼女が心配で声をかけようにもその子の気持ちが全く分からなかった私は、どう声をかけていいのか分かりませんでした。そのまま話すこともあまりないまま転校していきました。転校していつてからも、手紙のやりとりはしていたけれど、今は全くしていません。

小二の時のその子の変わりようは、今でもよく覚えています。家族や大切な人が亡くなれば、人はあんなに変わってしまうものなんだと、今思えます。

お話をしてくれた方が言っていたように、人は死んでしまつたら「夢も未来もなくなる」。本当にそのとおりでと思いました。仲良くなったばかりで見たこともなかったその子のお父さんだけれど、彼女にとつては大切で大好きなたった一人のお父さんです。そんなお父さんを亡くした友達を近くで見えていたからこそ、一人でも人が死ぬということは、たくさんの方が悲しみ、人によつては自分の人生も変えてしまうほど一つ一つの命はとても大きくなによりも大切なものなんだと実感しました。彼女も火事がおこっていません。今も同じ中学校で同じ時間を共に過ごしていたのかもしれない。今日聞いた話とその友達の出来事が重なって、命は本当に大切なものなんだと心の底から思います。

最後のビデオで「空手で黒帯になりました。」という一文がありました。私も、空手を習っているのと同じように空手を習っていた子が亡くなっているという現実をみて、今度は自分と重なって、本当に事故は自分の身近にあると思いました。

たくさん奇跡が重なりあって、今、私には命があり、今を生きています。その奇跡の命を自分で未来につなげていきたいです。私の将来の夢は看護師になることです。看護師は、そんな奇跡の命を未来につなげることをサポートする仕事です。私はそんなすてきな役割がしたいです。そのために、まず自分の命を守っていきます。今を大切に、私の奇跡の命を未来へ、そして人の未来へつなげていきます。





# 【高校生の部】

## 命の大切さを学ぶ教室で得たもの

(山口県)

山口県立小野田工業高等学校 三年 テイラー 優介ゆうすけ

私の学校では、「命の大切さを学ぶ教室」として、県内の高等専門学校で起きた女子学生殺害事件の被害者のお母さんによる講演を聴かせていただきました。この方は、事件の内容、当時の気持ち、現在の思いや活動など、たくさん話をしてくださいました。最初は、みんなのため、娘さんのためにとは言っても、どうして辛い過去を思い返してまで、たくさんの人にお話しされるのだろうかと思いました。しかし話を聴いているうちに、どうしてこのような活動を続けることができるのか分かってきました。被害者のお母さんの中谷さんは、突然愛する娘を失った事件当時の思いを「泥の中で踏みつぶされるように重くて苦しかった」とおっしゃっていました。しかし、警察の方々や弁護士の方々など多くの人達のおかげで、生きることによって正面から向き合えるようになり、人と支え合うことの大切さを感じたそうです。このような方の話やインタビューをテレビや新聞、インターネットで見ることがあります。しかし実際に遺族の方から話を聴くと一段と現実味を帯び、身近に感じました。また、この講演会を通じて、命について深く学び、考えさせられました。

まず、ニュースや新聞の見方が大きく変わりました。酷い事故や、事件の話を聞いても、「可哀想だな、酷いことをするな」程度しか考えていませんでした。しかし、講演会以降、被害者やその家族の方など様々な人の立場になって考えるようになりました。

最近見たニュースだと女子高校生が友人に殺害されるという事件がありました。この事件は、被害者の女の子が友人に「殺して」と頼んだそうです。でも、もし自分が友人にこのようなことを頼まれても、命を奪うという方法は絶対に選びません。なぜなら「死」という選択は、悩みの解決にも、苦しみからの解放にもならないからです。生きてさえいれば、何らかの解決策はあると思います。だから、人を殺す人や、自殺をする人が許せません。

私の祖父は半年程前に亡くなりました。がんだったので日に日に弱っていく祖父を見るのは辛く苦しいものでした。しかし、講演会で中谷さんが、突然娘を失う辛さについてお話しされていたので、死期が分かるだけ良いと考え方を切り換えることができました。それからは、悔いが残らないように、ほぼ毎日病院へ通い、たくさんのお話を話しました。祖父は、亡くなる日の午前中、お見舞いに来ている人、一人一人に「ありがとう」と言っていました。その時は深く考えてはいなかったのですが、祖父の死後、改めて考えると、あの「ありがとう」にはすべての意味が込められていたのだなと思いました。この「ありがとう」は一生忘れないと思います。中谷さんの講演会のおかげで、苦しみや、悲しみで愛する人の死から目を背け逃げるのではなく、祖父の死と向き合い、良い形で、悔いなく送り出すことができたのではないかと思います。



最後に、この講演会で「命の大切さ」から自分を生んでくれた両親だけでなく、自分まで「命のバトン」を繋いでくれた先祖の方々、自分を育ててくれた家族や関わってきた全ての人への感謝を再認識することができました。

「命」の重さ、大切さは分かっても、未熟な私では「命」の重さや大切さを他の人に伝えるのは難しいです。だから、これから仕事をしたり、たくさんの人と関わっていく中でさらに学び、いずれ「命の大切さ」を語り、たくさんの人達に影響を与えられる人間になりたいです。

講話を聴き、大切にしたいこと

(岐阜県)

岐阜県立岐阜各務野高等学校 一年

大塚彩妃

七月十日、六限目。今日はその時間に講話があるぞ、と聞かされ、朝から少し陰鬱な気持ちでした。その講話は、「命の大切さを知る」というタイトルでしたが、体育館の床は固いし、気温は高い、それに命が大切だなんて知っている…と、今思えば大変に失礼なことですが、この時私はそう思っていたのです。

しかし、話が始まるとそんな気持ちは吹き飛び、私は話にのめりこんでいました。講師の一井彩子さんの壮絶な体験に、です。耳をふさぎたくなるような、息子さんを亡くされたときの話。憤りを感じた、守られる加害者についての話。そして、一井さん自身が辛いことや苦しいことを乗り越えて今、ここまで来ることができたのだ、と話して下さいました。直接関係している訳ではなくても、心に響く内容ばかりでした。ですがその中でも、一井さんからのメッセージに感動しました。

一つ目、人の痛みが分かる人になること。

二つ目、相手の気持ちを考えること。

三つ目、思いやりを持つこと。

そして本当に最後になって、

「何かあったら、私たち大人に言ってほしい。相談してほしい。甘えて頼ってもいい。」

という涙ながらに口にした一井さんの言葉に、本当に感動したのです。友人には強がって泣いていない、とは言いましたが、この言葉を受けたとき、私はポロポロに泣きました。一井さんの言葉一つ一つが本当に温かく、心を打たれたからです。今回このような場で貴重なお話を聴くことができ、本当に良かったと思えました。

その日の夜、帰宅した私は、色々なことを考えてみました。本当の思いやりというのは何なのか、相手の気持ちや痛みを知るには具体的にどうすればいいのか。今まで当たり前のように、相手の気持ちを考えましよう、思いやりを持ちましよう、とは言われてきましたが、真にその意味を理解することは出来ていなかったのだと痛感しました。そんな時、ふとSHRでの先生の言葉を思い出したので。

「今日の一井彩子さんの話で何を思ったのか。どんな気持ちで一井さんが皆にこの話をしたのか、もう一度考えてみてね。」

その言葉と共に、たくさんの考えがぼつぼつと浮かんできました。そして、自分なりの答えを出すことができました。

「思いやり」とは自分が定義づけるものでなく、自然と出てくる優しさだ

というものです。散々悩み、考えたあげくこんな答えしか出ませんでした。自分でしっかり納得がいくものを導き出せたということがとても嬉しかったです。きっと、口にする事すら辛い内容を話してくれた一

井さんの行動も、今こうして人の気持ちについて考えていることも、思いやりの一部なのだろうと思っています。ささいなことでも見方を変えれば、すばらしいものになることもあるように、私も広い視野を持ち、一井さんが教えて下さった人として大切にすべきである三つのことを忘れずに持っていられる、そんな人になりたいです。

今回のような講話をしてくれる人物も場もおそらくとても少ないと思います。だからこそ私は、一井さんの話の内容や、大切にしたいこと、自分で考えたこと、思ったこと、たくさんのことを忘れず、自分のための知識としたいです。そして今一度、自分の周りにあるものを見つめなおし、大切なものに気づけるようになりたいと心から思いました。またこのような、考えを改めることができる場をつくって下さった方に感謝をしたいと思います。ありがとうございました。

講演会を聞いて

(青森県)

青森県立八戸高等学校 二年

小川 青夏

私は今回の講演会で、殺人の酷さと犯罪者を裁く法のありかたについて、深く考えさせられました。講師の方が娘を殺されたお母さんであることは少しも想像していませんでした。大切な家族を殺されるという経験は、誰も予測しない、本当に辛いことだと思います。お話の中で私が衝撃を受けたのは、ご遺族を傷つける周囲の人の言葉でした。「もう一人、娘さんがいて良かったね。」「都会に若い娘を出すと怖い目に遭うんだよ。」「こんなに心ない言葉を言う人がいるのか、と私は胸が苦しくなりました。残された妹が姉の代わりになることは決してなく、二人とも大事なたった一人の娘だと講師の方はおっしゃいました。もう一人娘がいるから「良かった」なんて決して言うてはならないと思います。講師の方は娘を殺された後、たくさんの方に怒りの感情を持ったとおっしゃいました。それは、報道や裁判、自分など様々です。親として「どうして防げなかったんだろう。」「自身を責める気持ちもあったと思います。そんな遺族の方に「都会に若い娘を出すと怖い目に遭うんだよ。」「と言う言葉は、まるで横浜という大都市に娘を送りだした自分達が悪い、と

いう意味に捉えられるだろうと思います。このような言葉をかけられたご両親の気持ちを考えると息が苦しかったです。また、犯人の殺人の動機や、殺人後の行動にも、私は衝撃を受けました。被害者の方は殺人の「練習台」であったそうです。大事な命をそんな風に捉える価値観が信じられませんでした。殺人を行った後、犯人は自殺未遂を図りましたが、大法院で一命をとりとめたそうです。人を殺して自分も死のうとするなんて、これほど無責任で自分勝手な決断はないだろうと思います。もし自分の身近で、このような事件が起こったら…。目をそむけたいような辛い想像ですが、犯人を一生、決して許せないだろうと思います。講演の中で「報道も遺族を傷つけた」という内容のお話がありました。微妙な言葉のニュアンスが、時にご遺族を深く苦しませてしまうのだということが分かりました。娘が自殺したという誤解を招くような大きい見出しや、容疑者への「さん」付け、「女友達」や「無理心中」といった表現に深く傷ついたと講師の方はおっしゃっていました。私は報道する立場の人間は責任を持って、慎重に言葉を選ばなければならないのだと思いました。お話を聞くほど「残された家族にもこんなに深い悲しみを与える殺人をどこかで防ぐ道はなかったのだろうか。」「胸が苦しくなりました。犯人は懲役十四年の刑に処せられ、二〇一〇年に社会復帰をしています。私には、あまりにも短すぎるように感じます。「こんなに残酷な方法で人を殺した人間が、たった十四年で罪を償ったことになるのか。」「と心から思いました。失われた命はもう戻らないと思うと残された家族は言葉にできないほどの悔しさを今も抱えているだろうと思います。講師の方は「裁判の中で言われる『あなたにとって不利にな

ることは言わなくても良い』という言葉はどうしても納得ができない。』とおっしゃっていました。加害者の人権も守るべきであることは分かかります。しかしなぜ「真実を述べてください。」と言わないのか。私はまだ浅はかで知識も乏しいですが、将来自分で答えを見つきたいと心から思いました。今回の講演でお話いただいたことは、今までの私にとって『ニュース』だったことでした。しかし、それは大きな悲しみや痛みを伴う『現実』です。この講演会で、普段は目をそむけたくなるような『現実』について向き合い、自分なりに考えることができました。講師の方は思い出すだけで苦しいような出来事を言葉にして、私たちに届けてくださったかと思うと本当に有難く、一生心に刻もうと思えました。今、私は生きて、存在しています。かけがえのない誰かを愛し、愛されているということが大きな幸せであると、深く、深く教えていただいたと思います。

生の証

(秋田県)

秋田県立湯沢高等学校 二年

小川 慧子  
おかわ さとこ

皆さんは自分の「死」について考えたことがあるだろうか。少なくとも私は、死について考えるどころか、生きていることが当たり前のことと感じていた。しかし、ある出来事によって、「死」を身近に感じ、そして命の大切さについて考える機会を得た。

昨年、私は一人の大切な友人を亡くした。思いもしない出来事だった。高校の入学試験を目前にして、友人は病にかかったのだ。病床より送られてくるメールの文面は、以前の様子と変わったところがなく、誰もが病は治ると信じていた。友人の死を突然知らされた時、私はそれを理解出来ず、受け入れられなかった。葬儀に参列し、遺族の方々が泣き崩れている背中を目にし、他愛もない学校生活が思い出され、もう会えないという現実が悲しみとなってこみ上げ、涙が止まらなかった。

この経験を通して、亡くなることの悲しさ、寂しさ、そして怖さを感じた。たくさん話したいことがあったし、感謝を伝えたいこともあった。これから何十年先も交流のある仲間だと思っていたから、ありがたうの言葉を伝えられないままお別れの時を迎えてしまった。もし、友人が亡

くなると知っていたら、私の行動は違っていただろう。失って初めて気付くのだ。しかし、失った命は二度と返ってくることはなく、後悔しても現実には変わらない。

先日、私は「命の大切さ学習教室」に参加し、交通事故で娘さんを亡くした女性の話を伺った。その内容は、友人を失った私の気持ちと通じ合うところがたくさんあり、心に強く響いた。その女性もまた、いつものように娘さんを見送り、その日の午後突然失い、たくさんの後悔の念に包まれたという。遺族の方の心の傷は、時を経て癒えることはなく、その傷を一生背負ったまま生きることだろうと語っていた。故人の時は止まっても、世の中の時は止まることなく流れ続ける。「同級生の子は年を重ねるのに、私の娘はずっと大学三年生のまま。娘の今の姿を想像することができなくて悔しい。在学していた大学の名簿にバツのマークがつけられ、この世から娘の名前が消え、生きていた証がなくなっていくことが一番悲しい。」という女性の言葉から、世の中が絶えず変化してゆく中で、自分が生きた証はどのような形で、どのように残すべきか考えた。

友人を失い、もうすぐ一年が経とうとしているが、私の周りで友人を忘れたものはいないだろう。死への恐怖を感じながらも、最後まで辛い治療に専念し、生きようと頑張ったことを誇らしく感じ、友人は私達の「心」という新しい場所で生きているのだ。これが友人の残した「生の証」だと私は考える。様々な技術が発達する今日においても、不慮の事故や重い病で突然生涯を閉じる方がいる一方で、自ら死を選ぶ人もいる。私は、決してあつてはならないことだと改めて強く思う。命はかけがえの

ないもので、失ったら二度と返ってこないものである。人間一人ひとり  
が一つも同じものではなく、その生き方はどれも素晴らしい。

命の終わりは誰にも予期することは出来ない。だからこそ、今を大切に  
過ごすことが私達の使命だと感じる。そして、日常生活の中で、感謝  
の気持ちを忘れてはいけない。私は、ふと友人の父の言葉が頭をよぎっ  
た。「苦しいことがあつたら、私の子供のことを思い出して頑張ってく  
ださい。」

私は、命の大切さをかみしめながら、自身の夢に向かって精一杯進ん  
でいきたい。そして、周囲の人々に苦しみを与えるのではなく、懐かし  
さを感じてもらえるような「生の証」を残したい。

## 何よりも大切な命

(山形県)

山形県立庄内総合高等学校 一年

齋藤 翔子  
さいとう しょうこ

私は、九月三日に、事故によって小学一年生の娘さんを亡くした方の講話を聞きました。今まで、私の周りで誰かが亡くなったりして「死」というものに直接関わったことはありません。ですが、今回娘さんが事故に遭われた時の状況を涙ながらに詳しく教えてくださる姿を見て、私は命の重みを実感しました。

私は、この講話を聞いて気づいたことが四つあります。

一つ目は、自分の命や自分が生きている時間は、自分のものだけではないということ。自分の命は、親が命をかけて私にくれたものであること、そして、私が今まで生きてこれたのは、親や今まで私に関わってきてくれた人たちのおかげだと気づきました。だから、親や関わってきてくれた人たちに、感謝の気持ちを伝えていきたいと思えます。それに、自分が生きている時間は、不慮の事故や病気などによって亡くなった人が、どうしても生きてきたかった時間、そして、大切な人を亡くした人が、どうしても生きていてほしかった時間なのだと思います。その人達の思いを、無駄にしないように生きていこうと思います。

二つ目は、「死ね」という言葉の重みについてです。この講話を聞くまで、私は「死ね」という言葉を簡単に使っていました。ですが、講話で実際に命の重みを感じ、「死ね」という言葉の本当の意味をよく考え、その言葉がどれほど残酷なものであったのか気づきました。今まで、自分が放った「死ね」という言葉が人の心の奥まで傷つけていたことに気づき、もう何があっても絶対に使わないと誓いました。

三つ目は、私の命だけでなく、他人の命も大切にしなければいけないことに気づきました。講師の先生は、娘さんが亡くなった時、涙が出なくなり、自分だけが生きていることが許せず、死ぬ方法まで考えたそうです。人は、悲しみのどん底にいる時、感情が停止して、涙すら出なくなることもあると聞きました。講師の先生その時の悲しみは、とても大きなものだったのだと思いました。私は、このように辛い思いをする人を増やしたくありません。その為に、命を軽く考えている人がいたら、私が講話を聞いて命の重みを感じたように、その人に講話で聞いた話をしてあげたいと思います。そして、少しでも事故を起こさないように気をつける人や、病気になるないように気をつける人が増えてくれたら嬉しいです。

四つ目は、後悔のしない生き方をしなくてはいけないことに気づきました。自分の家族や友達が私の周りにいるということは、今まで当たり前のことだと思っていたし、誰かがいなくなってしまうなんて考えたこともありませんでした。しかし、それは講師の先生が娘さんを亡くしてしまっただけのように、いきなり奪われてしまうことがあるのだと気づきました。だからこそ、いつも周りの人を大切にしていきたいと思えます。



私は私の未来に希望を持っています。これから自分が、どんな大人になつてどんな人生を送つていくのか楽しみでしょうがありません。それは、小学一年生で亡くなつてしまつた講師の先生の娘さんも一緒だつたと思います。そんな一人の女の子の未来を奪つた加害者の人が憎いです。しかし、どんなに憎んでも女の子の命は戻つてこないのです。今、私にできること、それは、女の子の命の分まで一生懸命に生きるということです。私は、「命の大切さを学ぶ教室」を受けけることで、命の大切さを実感しました。今の私より若い年齢で亡くなつてしまつた女の子、その女の子に恥ずかしくないよう、私は命があること、生きていることに感謝し、未来に向かつて歩んでいきたいと思ひます。





